



北中学校(手前左側)東側から北へ通じるバス道路
(突き当たりが春日丘4丁目付近)



伊丹の白洲屋敷にあった大水槽の写真見つかる

平成16年10月発行のいたみティ61号で、実業家白洲文平が大正時代はじめ、現在の伊丹市春日丘4丁目の小川医院北側付近に興味で建てた大邸宅「白洲屋敷」の一端を紹介したが、この白洲屋敷の西端にあったレンガづくりの大水槽の写真が見つかった。

写真は、この水槽の隣接地に住んでいる元木俊幸さん宅に保存されていた。給水塔は高さ約10メートルあり、ツタが覆い、茂っている。

昭和の前半までに伊丹で生まれた人たちにとっては懐かしい水槽で、元木さんの話では、倒壊の危険性が高くなったことから平成元年ごろに取り壊されたという。

実業家白洲次郎は伊丹で婚姻届提出

この白洲屋敷の敷地は4万坪(13万2千平方メートル)といわれ、見事な牡丹園や美術館もあったという。この大邸宅は、昭和5年ごろ、文平が破産したため手放し、その後、分割して売られ、相次いで住宅ができた。このとき水槽も壊そうという話がでたが、だれかが「たたりがある」といいたことから残ったという。

文平の二男で、戦後の総理大臣吉田茂の懐刀として、新憲法制定に関わり、東北電力会長としても活躍した白洲次郎も一時は、この邸宅に住み、次郎が随筆家の正子と結婚したとき、届けを伊丹町役場に出している。

白洲文平が伊丹高女建設資金に1万円を寄付

また、文平が大正10年4月、伊丹に開校した

に屋敷を手放し、土地は分譲されていた。

当時、この分譲にかかわったという伊丹市中央にある光栄住宅(株)の中山鐵夫社長は「白洲屋敷を壊すとき、玄関などのつくりがあまり立派だったので捨てるのは惜しい、ということになった。それで玄関などの材料を再利用してくれる人を探した、という話を聞きましたよ。それにしてももらった人は大変だったでしょうね。家をつぶして材料を運搬、そして建てるのですから相当の費用がかかったと思いますよ」と教えてくれた。

この話を郷土史を調査研究している森本啓一さんに伝えた。森本さんは、父が八崎さんの会社に勤めていた関係で八崎家に入りました。社があり、すでにこの話を知っていて調査を進めていた。どうも京都市内のお寺にもらわれていたらしいというのだが！。

町が白洲屋敷への道も新設

また、この記事の中に「学校横より白洲氏邸前に通ずる道路新設の件」が町議会で審議されたことを示す文章もある。

学校は当時の県立伊丹中学校、現在の北中学校で、同校の東側から北へ約150メートルの白洲屋敷があった春日丘4丁目を経て、緑ヶ丘へ通じるバス道は、それまで細い農道だった。この記事から見て、この道がバスなど自動車が行き来できるまで広くなったのは大正10年以降と考えられる。

白洲屋敷の古い建材は京都市内のお寺へ?

白洲屋敷は、白洲文平が昭和5年に破産したあと人手に渡り、昭和10年代半ばに伊丹市内で大阪栄養工業株式会社を創設した八崎治三郎さんの所有となった。しかし八崎家も昭和40年前後

川辺郡立高等女学校の設立資金として1万円を寄付したことを示す当時の新聞記事のコピーがある。

新聞の名称や発行年月日は不明だが、記事に「伊丹町会が9月15日開かれ、寄付採納2件」などとあることから大正9年9月16日ごろの新聞と見られる。

この記事のコピーは悪く、全部は読み取れないが、文中に「二万円小西新右衛門」をトップにして二番目に「二万円白洲文平」とあり、このあと順に寄付金額と名前を掲載している。

そして寄付金の合計額は6万2千3百50円。当時の1万円を現在の貨幣価値で見ると5千万円から1億円にあたるのではなからうか。

同女学校は、その後県立伊丹高等女学校となり、戦後の学制改革で県立伊丹中学校と合併、現在の県立伊丹高校へと引き継がれた。